

二〇一九年度国文学会彙報

大阪府立茨木高等学校教諭 有田祐輔

〈国文学会・研究発表会・講演会〉

二〇一九年二月五日(日) 良心館三〇四教室

・研究発表

『大日本国法華經驗記』前世夢告説話における方法

『雑誌の時代』の終わりに  
本学大学院博士課程前期課程 高山卓

「雑誌の時代」の終わりに

——村上春樹「TVピープルの逆襲」論

『山月記』における「言語文化」の指導  
本学大学院博士課程前期課程 後藤大介

『宇治拾遺物語』藤原朝成 水飯考

『国文遊歩』 学生部会主催  
比叡山高等学校教諭 村上泰規

・講演 同志社大学文化学会共催

『宇治拾遺物語』藤原朝成 水飯考  
本学教授 廣田收

〈国文遊歩〉 学生部会主催

第一回 二〇一九年六月二三日(日)

野宮神社、嵯峨嵐山文華館

第二回 二〇一九年二月一日(日)

南禅寺、伝統工芸手作り体験

〈講演会〉 院生部会主催

二〇一九年十一月二六日(土) 弘風館三階三一教室

二〇一九年度国文学会活動状況

〈新入生歓迎会〉 学生部会主催

二〇一九年四月五日(金) 新島会館

〈国文学会総会・研究発表会〉

二〇一九年六月三〇日(日) 良心館三〇五号教室

・総会

・研究発表

多音節訓仮名と訓字

本学大学院博士課程後期課程 吉岡真由美

時間副詞『スナワチ』について

——文体比較を中心に——

本学大学院博士課程後期課程 胡鴻洋

佐藤春夫「のんしゃらん記録」

——ユートピアにおける空間と身体——

本学大学院博士課程後期課程 中嶋優隆

対話する人を育てる「対話的な学習」

——高校国語の実践を通して——

二〇一九年度国文学会彙報

日本学問編成史という視角

——前近代から近現代へ——

近畿大学教授 藤巻和宏

△履修相談会▽ 国文学研究会主催

二〇一九年四月二日(火)・四月三日(水)

良心館四階四二二教室・四二二教室

△ゼミ相談会▽ 学生会主催

二〇一九年十一月二日(火)・十一月五日(金)

良心館一階一〇一教室

△国文合宿▽ 学生会主催

二〇一九年八月二五日(日)～八月二六日(月)

同志社びわこリトリートセンター

△国文合宿▽ 院生部会主催

二〇二〇年二月二七日(木)～二八日(金)

兵庫県豊岡市 城崎温泉

△同志国文学▽

第九一号 二〇一九年十二月二〇日発行

収載論文四編、資料紹介三編

第九二号 二〇二〇年三月二〇日発行

収載論文一九編、資料紹介四編

△国文学会会報▽

第四七号 二〇二〇年三月二〇日発行

二〇一八年度博士論文題目

横光利一とその時代——モダニズム・メディア・戦争——

竹田からくりの研究

武田泰淳中国小説研究

——中国語資料援用の試み——

二〇一九年度博士論文題目

『萬葉集』における訓仮名の基礎的研究

『覚一本平家物語』考

近代日本における徳富蘆花文学のメディア的展開

二〇一九年度修士論文題目

『源氏物語』における玉鬘の衣裳の色彩に見られる機能

——撫子・常夏・山吹の使い分け——

香ノ木 麻由

黒田 大河

山田 和人

藤原 崇雅

吉岡 真由美

城阪 早紀

平石 岳

『御伽人形』再考

——「怪談」「巷談」両系所収話をめぐって——

中村 崇太郎

『風雅和歌集』における撰歌意識について

——京極派・二条派歌人の歌に注目して——

塚本 舞衣

『和泉式部日記』の主題——和泉式部と師宮との関係と

心情の変化

夕顔と玉鬘の人物像

——「呉竹」との関連性を中心に——

光源氏を導く女君たち

——六条御息所と明石の君を中心に——

『源氏物語』第二部における女三宮の役割

——若菜の巻を中心に——

『源氏狭衣百番歌合』

——定家の物語受容——

紫の上の心情

——女楽における演奏の裏側——

『更級日記』の猫の夢について

——『源氏物語』の影響から——

孝標女が送った薄幸な晩年から読み解く『更級日記』の

構成的意図

『今昔物語集』における安義橋の鬼の特色

——卷二十七第十三話を中心に——

『今昔物語集』卷三十卷四話の特徴

——男と女の描かれ方を通して——

石田 若奈

日當 真心

木村 梨子

森 茉友花

里村 奈央

宇佐見 侑紀

小林 美美

芝 沙耶香

藤本 愛美

井上 真由

二〇一九年度卒業論文題目

『古事記』、『日本書紀』における大国主神の系譜について

遠藤 優太

古事記下巻雄略条「吉野の童女」考

今中 彩織

万葉集の譬喩歌について

田畑 貴大

朝川渡る但馬皇女の恋心

塩村 円茄

『萬葉集』六五三～六六一番歌に関する研究

柳田 結

中臣宅守と弟上娘子、その関係性

山口 夏海

——宅守歌を中心として——

天徳内裏歌合の二十番歌に対する評価の時代的変遷

茶谷 明日香

『蜻蛉日記』参詣記事における風景

河嶋 ひかり

『落窪物語』における作品構成の特質

八田 真穂

『今昔物語集』における「悪の童形」

——童子信仰と中世社会の視点から——

浦野 洋紀

『宇治拾遺物語』第九二話「五色鹿事」の説話的特質

橋本 友太郎

式子内親王「正治初度百首」の研究

伊藤 穂乃香

式子内親王の落葉の歌

——植物や表現を二十一代集と比較して——

岡本 ちあり

『とりかへばや物語』の女君と結末について

西野 朱夏

『住吉物語』の継子譚としての特徴

岡本 真梨菜

七夕歌表現の時代ごとの広がりの変遷について

伊藤 愛

古典和歌における「蟬」

山東 なつみ

——時代や種類で考える——

橘歌考

——『万葉集』から『新古今和歌集』まで——

「薄」と「萩」の考察

高木 真鈴

——八代集を中心に——

氏本 光穂

『十六夜日記』における月の和歌

——八代集と比較して——

草野 凱史

『とほすがたり』における装束描写と解釈

——男性の衣を中心として——

井上 愛美

『平家物語』における「足摺」

——その意味と効果——

南井 爽花

『兼好法師集』における配列の考察

——季節観と述懐歌の視点から——

鶴田 麻未

御伽草子本『浦島太郎』の結末について

金子 優衣

『転寝草紙』の夢と効果

疋田 貴穂

『転寝草紙』における物語展開の面白さ

→夢、垣間見、入水の出来事に注目して→

山本 いつき

『角田川扇合』の魅力とは何か

——古典作品との関わり・判詞に注目して——

山本 佳奈子

『万治御点』考

歌題を視点に

柴田 至輝

「市中は」歌仙考

畑山 徹平

——月の異例と花の逆転——

『冥土の飛脚』より、新口村の段における改作とその狙い

藤田 梓

歌舞伎舞踊における「道成寺もの」の展開

——なぜ「京鹿子娘道成寺」が人気なのか——

獅野 勇貴

仮名草子に登場する「蛇」の描写

仕掛け本とうがち

京伝作品における歌舞伎要素

『南総里見八犬伝』の悪女

——八犬伝の悪女から見る玉梓の特異性——

黒田 綾乃

近世文学における蝦蟇の妖術

——蝦蟇が作品において持つ意味——

歌舞伎・狂言における刀剣

——その特徴と役割に注目して——

近世芸能における竜の霊験奇瑞

——竜の力による不思議な現象としての

竜の霊験奇瑞のありようについて——

『葉草取』の特徴と鏡花の願い

——

『夜叉ヶ池』に於ける他作品の影響とその評価

黒岩 諒

葛西善三「子をつれて」論

——〈生活〉を描写する〈目標〉について——

上野 寛樹

有島武郎の対読者意識

——翻案童話「燕と王子」の成立から——

芦野 陽子

「秋」における芥川龍之介の挑戦

「暗夜行路」 信行を中心に

谷崎潤一郎「秘密」論

谷崎潤一郎「金色の死」と芸術論

——「月の囁き」と「人面痘」が映画化されなかった理由——

森 本 菜 月

谷崎潤一郎『痴人の愛』論

——ナオミの人間像についての考察——

フランスにおける谷崎潤一郎の受容の変遷

——二つの「礼讃」をめぐる——

菊池寛『ある恋の話』 試論

——視線を軸として読む——

堀辰雄『燃ゆる類』における同性愛的関係と結核について

「人間椅子」論

——その時代的特徴と描写の効果——

山田 桂 菜

——乱歩が読者に意識させようとしたもの——

宮沢賢治作品と〈食〉

——「すきとほつたほんたうのたべもの」とは何か——

大川 祐 未

江戸川乱歩「黒蜥蜴」論

濱 田 昂 城

宮沢賢治「土神ときつね」考察

水 田 千 尋

——女性キャラクターの造形と役割——

——最終段落が意味するもの——

白 崎 里 砂

夢野久作『冗談に殺す』

与 儀 朱 里

イーハトーヴ童話における猫の表象

小 野 ひとみ

——閉鎖空間における自己像——

梶井基次郎「檸檬」に至るまで

豊 田 美 咲

「ドグラ・マグラ」の全体構造

田 井 みなみ

——「秘やかな楽しみ」「瀬山の話」と自己の分裂——

岡本かの子『老妓抄』が語る理想の女性像

吉 田 梓

梶井基次郎における「闇」の意味

森 初 音

——人物像・時代背景・短歌の視点から——

——「冬の蠅」を中心に——

中 村 梨 恵 子

詩人の葛藤

有 馬 千 尋

梶井基次郎「器楽的幻覚」論

前 田 陽 向

——中島敦が「狐憑」を通して描いた「詩人」の姿——

——「幻覚」体験について——

井 伏 鱒 二 『さざなみ軍記』論

佐 藤 舜 也

横光利一「春は馬車に乗って」

太 宰 治 『トカトントン』論

本 田 滯

——作品と新感覚的表徴の融和——

——登場人物の見つめるもの——

『走れメロス』論

高 松 さ や か

江戸川乱歩「二銭銅貨」における知恵比べの構図

——音に託された意味——

——音に託された意味——

高 松 さ や か

『夫婦善哉』にみる家族像と時代性

——大正期における家族関係のジレンマ——

齋藤 新太郎

坂口安吾「青鬼の禪を洗う女」

——〈随ちぬけない〉人間としてのサチ子——

堀田 早貴

坂口安吾「統戦争と一人の女」論

——「私」が語るということ——

市川 智尋

坂口安吾「私は海をだきしめてゐたい」における

「不感症」と〈男らしさ〉について

中嶋 慎太郎

原民喜「夏の花」論

——書きのこすための〈小説〉——

細川 有希

松本清張『張込み』に見る社会問題

——一九五五年頃の女性と出郷者の観点から——

高橋 美友

川端康成『山の音』論

三島由紀夫『仮面の告白』論

——「私」のための仮面劇——

江木 天峰

平塚 千遼

三島由紀夫『海と夕焼』論

——二つの海と禅宗世界を中心に——

「壁」——S・カルマ氏の犯罪」における「壁」 イメージ

大江健三郎、初期作品の再考察

——動物表現を中心に——

『海と毒薬』論

——「私」の役割——

山崎豊子『女系家族』論

——船場という土地から見えてくるもの——

「中国行きのスロウ・ボート」をめぐる村上春樹の

到達地点について

『パン屋再襲撃』における「呪い」

——「記号」を通して——

流行を捉えた吉本ばななの是非について

姑獲鳥の夏論

川上弘美「いまだ覚めず」の一考察

——「記号」を通して——

流行を捉えた吉本ばななの是非について

姑獲鳥の夏論

川上弘美「いまだ覚めず」の一考察

——「記号」を通して——

流行を捉えた吉本ばななの是非について

姑獲鳥の夏論

最果タビの詩情

——『夜空はいつでも最高密度の青色だ』をめぐる——

溝 測 明 子

村田沙耶香「コンビニ人間」の《コンビニ人間》の

意味への一考察

全 枝 英

古典落語『芝浜』の変遷

——三代目桂三木助と立川談志を中心に——

亀 甲 翔 太

名詞「みやこ」の変遷について

——上代から近世における意味・用法、

矢 野 由 里 子

複合語、漢字表記を中心に——

「おす」と「推」の意味

——意味借用・翻読語の観点から——

小 田 彩 花

「意見」「異見」の混同について

——中世から近世を中心として——

相 澤 み ず 穂

近世前期上方語における二段活用的一段化

——歌舞伎台帳を中心に——

浅 川 美 咲

狂言台本を題材とした引用構文の研究

「やはり」の成立と展開

吉 岡 潤

——現代と近世の意味用法のつながり——

青 木 雛

童謡・唱歌における終助詞について

——明治から平成までの変遷——

柏 木 沙 月

中島みゆき歌詞の日本語学的分析

——人称代名詞の使用傾向を中心に——

鄭 禮 恩

星野源の歌詞について

——語彙と表現の観点から——

橋 本 典 明

形容詞「かわいい」の対象について

——有名アイドルの「かわいい」の使用から——

宮 西 真 里 奈

フェンシングの指導に使用されるスポーツオノマトペについて

山 田 里 奈

漫画における描写中のオノマトペの表現効果について

——「ジョジョの奇妙な冒険」シリーズを中心に——

辻 耀 平

ビジュアルノベルゲーム「Fireシリーズ」における

ルビ・ふりがなの特徴についての考察 近 藤 優 実

『それいけ！アンパンマン』の登場キャラクターの

役割語について 齊 藤 菜 緒

映画作品における登場人物の立ち位置と言語の関係

——映画の役割語—— 武 田 遥 己



現代日本語における場面によるレトリック使用傾向

花田貴充

紙芝居における言語的特徴

鬼山花菜

数量詞の文中での意味とその関係

地村菜摘

——言語対照を通して——

日本語と韓国語における敬語の特徴

金珉志

高知方言のアスペクト表現

「ユウ」と「チュウ」の対立と中和について

井上裕二朗

沖縄県本島中部における「だからよ」「だからね」

「だからさ」の使い分けについて

伊禮舞夏